

## 秩父郡小鹿野町下塚居古墳副葬刀子の検討

青 笹 基 史

### はじめに

秩父郡小鹿野町は埼玉県西部に位置する町である（図1）。筆者は町内に所在する下塚居古墳の基礎的情報を継続して提示してきた（青笹2019, 2020, 2021）。引き続き下塚居古墳の基礎的情報の提示を目的として、本稿では副葬品のうち刀子の資料化をおこなう。併せて、保存処理の完了した金属製品のうち未図化であった鏃・弓金具・耳環についても資料化をおこなう。

下塚居古墳は墳丘規模が約14m以上の円墳で、埋葬施設に無袖羽子板形横穴式石室を採用している古墳である。石室内からは原位置を保っていないものの副葬品が出土しており、その内訳は、武器・装身具・工具・土器である。所在未確認の土器を除けば、図化に耐え得る副葬品は、今回ですべて資料化したことになる。本稿では、副葬品のうち刀子について、その構成と製作技法について検討する。併せて、未図化であった鏃・弓金具・耳環についても資料報告をおこなう。そのうえで、本例の刀子の評価と並行して、刀子の複数副葬という現象について埼玉県域を対象として若干の検討を行う。刀子単体での年代的な位置付けは困難であるが、これまでに位置付けてきた石室・矢鏃・玉の年代観との相対的な位置付けを最終的に確認できるよう、基礎的な情報を提示する。

### 1 下塚居古墳の概要

下塚居古墳は秩父盆地において赤平川が蛇行する北岸の段丘上に位置する千尋原古墳群中の円墳である（図2）。1994年に発掘調査された古墳で、筆者は2017年から小鹿野町で基礎的情報の提示を目的として遺物と図面類を対象とした調査を実施している。

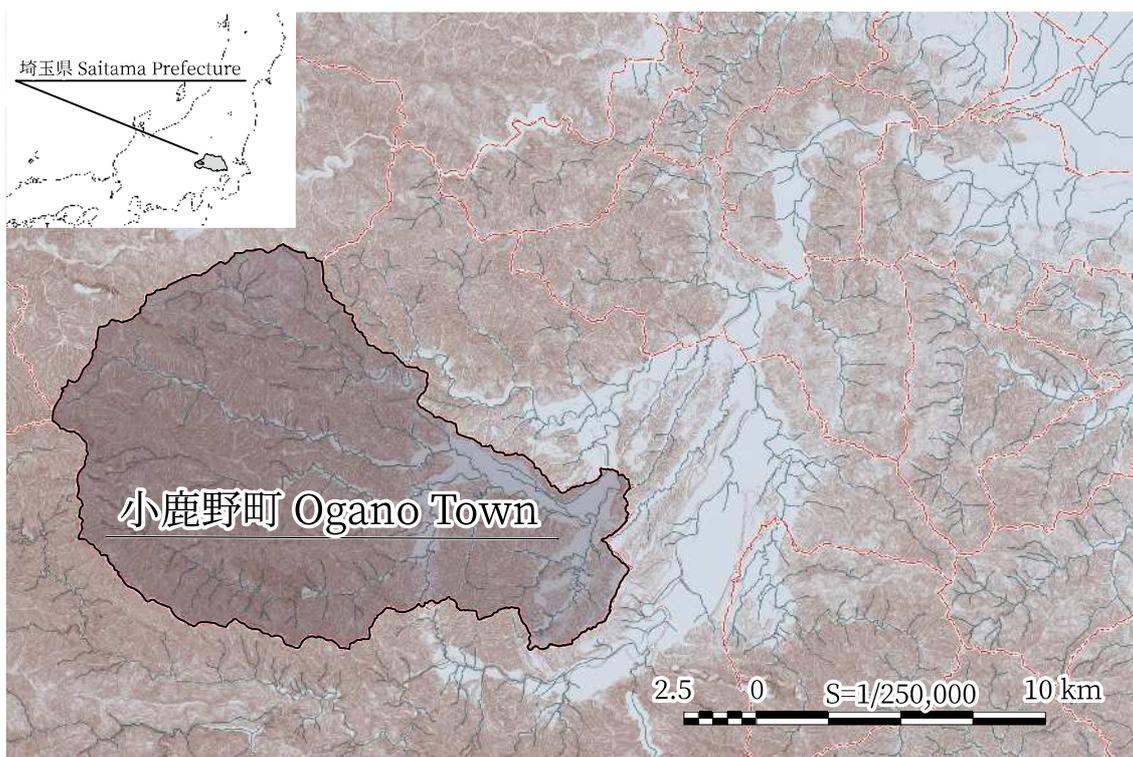


図1 小鹿野町の地理的環境



図2 下塚居古墳の立地

調査の結果、下塚居古墳は、全長 5.55m を測る無袖羽子板形横穴式石室を有する、長径 8.35m の馬蹄形控え積みと、復原径約 14m の外護列石が確認される円墳であることが確認された（図 3）。埋葬施設である石室からは、上下 2 面で遺物を取り上げられている。中世までに攪乱された上面（矢鏃・銭貨・土器類・人骨）と、中世以前の状況がある程度反映している可能性の残る下面（矢鏃・玉・耳環・刀子）に分けて、調査担当者が認識していた可能性がある。

## 2 下塚居古墳出土遺物の概要

下塚居古墳出土遺物については前稿で整理しているため（青笹 2019, 2021）、本稿では詳述を避け前稿の表を更新した（表 1）。石室内遺物取り上げ状況図に記載される土師器 1 点・須恵器 3 点・陶器 1 点・人骨については、前回より引き続き所在は確認できなかった。

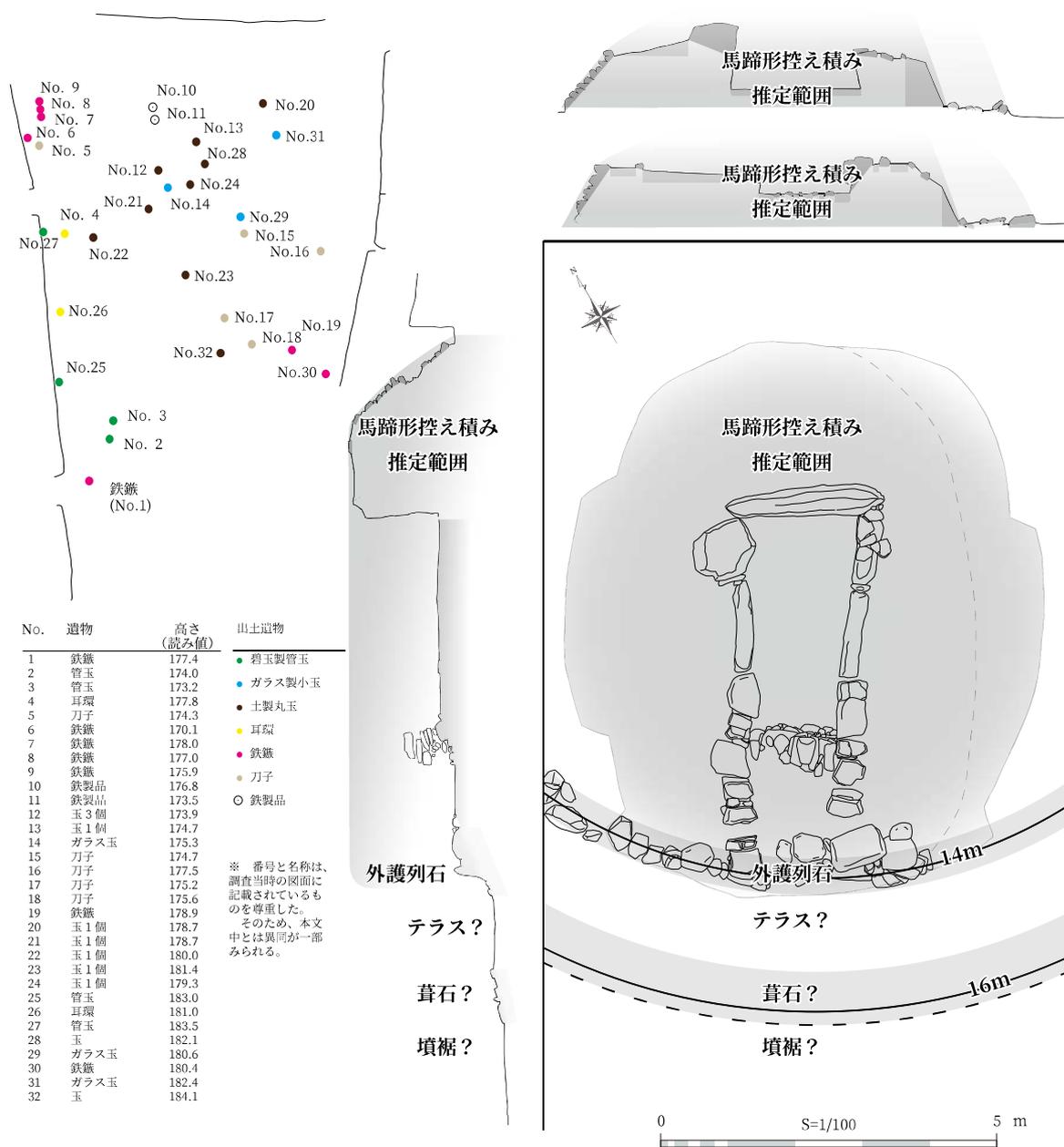


図 3 下塚居古墳副葬品出土状況と墳丘復原図

表1 下塚居古墳出土遺物台帳

台帳№	素材	資料	掲載年	図№	備考	台帳№	素材	資料	掲載年	掲載図№	備考
1	鉄	鍔	2019	6 図 1	短頸式	53	碧玉	管玉	2021	4 図 1	
2	鉄	鍔	2019	6 図 2	短頸式	54	碧玉	管玉	2021	4 図 2	
3	鉄	鍔	2019	6 図 3	長頸式	55	碧玉	管玉	2021	4 図 3	
4	鉄	鍔	2019	6 図 4	長頸式	56	碧玉	管玉	2021	4 図 4	
5	鉄	鍔	2019	6 図 5	長頸式	57	ガラス	小玉	2021	5 図 5	
6	鉄	鍔	2019	6 図 6	長頸式	58	ガラス	小玉	2021	5 図 6	
7	鉄	鍔	2019	6 図 7	長頸式	59	ガラス	小玉	2021	5 図 7	
8	鉄	鍔	2019	7 図 8	有頸平根式	60	ガラス	小玉	2021	5 図 8	
9	鉄	鍔	2019	7 図 9	長頸式	61	琥珀	棗玉	2021	6 図 9	
10	鉄	鍔	2019	7 図 10	長頸式	62	土	丸玉	2021	6 図 10	
11	鉄	鍔	2019	7 図 11	長頸式	63	土	丸玉	2021	6 図 11	
12	鉄	鍔	2019	7 図 12	長頸式	64	土	丸玉	2021	6 図 12	
13	鉄	鍔	2019	7 図 13	長頸式	65	土	丸玉	2021	6 図 13	
14	鉄	鍔	2019	7 図 14	長頸式	66	土	丸玉	2021	6 図 14	
15	鉄	鍔	2019	7 図 15	有頸平根式	67	土	丸玉	2021	6 図 15	
16	鉄	鍔	2019	7 図 16	長頸式	68	土	丸玉	2021	6 図 16	
17	鉄	鍔	2019	7 図 17	長頸式	69	土	丸玉	2021	6 図 17	
18	鉄	鍔	2019	8 図 20	長頸式	70	土	丸玉	2021	6 図 18	
19	鉄	鍔	2019	8 図 21	長頸式	71	土	丸玉	2021	6 図 19	
20	鉄	鍔	2019	8 図 22	有頸平根式	72	土	丸玉	2021	6 図 20	
21	鉄	鍔	2019	8 図 23	長頸式	73	土	丸玉	2021	7 図 21	
22	鉄	鍔	2019	8 図 24	長頸式	74	土	丸玉	2021	7 図 22	
23	鉄	鍔	2019	8 図 25	長頸式	75	土	丸玉	2021	7 図 23	
24	鉄	鍔	2019	8 図 26	長頸式	76	土	丸玉	2021	7 図 24	
25	鉄	鍔	2019	8 図 27	長頸式	77	土	丸玉	2021	7 図 25	
26	鉄	鍔	2019	8 図 28	長頸式	78	土	丸玉	2021	7 図 26	
27	鉄	鍔	2019	8 図 29	長頸式	79	土	丸玉	2021	7 図 27	
28	鉄	鍔	2019	8 図 30	長頸式	80	土	丸玉	2021	7 図 28	
29	鉄	鍔	2022	7 図 9	無茎式	81	土	丸玉	2021	7 図 29	
30	鉄	鍔		非掲載	長頸式	82	銅	錢貨			
31	鉄	鍔		非掲載	長頸式	83	銅	錢貨			
32	鉄	鍔		非掲載	長頸式	84	銅	錢貨			
33	鉄	鍔		非掲載	長頸式	85	銅	錢貨			
34	鉄	鍔		非掲載	長頸式	86	銅	錢貨			
35	鉄	鍔		非掲載	長頸式	87	銅	錢貨			
36	鉄	鍔		非掲載	長頸式	88	銅	錢貨			
37	鉄	鍔		非掲載	長頸式	89	銅	錢貨			
38	鉄	鍔		非掲載	長頸式	90	銅	錢貨			
39	鉄	鍔		非掲載	長頸式	91	銅	錢貨			
40	鉄	弓金具	2019	7 図 18		92	銅	錢貨			
41	鉄	弓金具	2019	7 図 19		93	銅	錢貨			
42	鉄	弓金具	2022	7 図 10		94	銅	錢貨			
43	鉄	刀子	2022	5 図 1		95	銅	錢貨			
44	鉄	刀子	2022	5 図 2		96	銅	錢貨			
45	鉄	刀子	2022	5 図 3		96	土	土師器			所在未確認
46	鉄	刀子	2022	5 図 4		97	土	須恵器			所在未確認
47	鉄	刀子	2022	6 図 5		98	土	須恵器			所在未確認
48	鉄	刀子	2022	6 図 6		99	土	須恵器			所在未確認
49	鉄	刀子	2022	6 図 7		100	土	陶器			所在未確認
50	鉄	刀子	2022	6 図 8		101	-	人骨			所在未確認
51	鉄?	耳環	2022	7 図 11		102	鉄	不明	2022	7 図 13	
52	鉄?	耳環	2022	7 図 12							

※ 下塚居古墳副葬品の出土位置は、①現存ラベルと資料の対応関係、②ラベル記載番号と図の番号が一致しないことから、厳密な照合が困難である。そのため、出土位置を特定できない形態不明の資料については、下塚居古墳出土の蓋然性を担保できないため、台帳から除外している。

### 3 下塚居古墳の副葬刀子について

下塚居古墳からは刀子が8点出土した。今回の調査ですべての刀子の計測と図化を実施した。刀子はすべて同じ箱に収蔵されていた（表2）。

刀子の出土状況は、石室内下面からの出土のみで上面からは出土していない。ただし、刀子のラベル記載番号はすべて「鉄製品」から始まっており、鉄製品は上面からも出土していることからその出土状況については不明確な点も残る。下面の遺物取り上げ状況図には刀子が5点記載されることから、刀子は下面から出土している可能性が高いが、残りの1点がどの鉄製品であるか特定できないため、断定は避けたい。下面で特定可能な5点の刀子に限れば、その出土位置は西側側壁付近の1点を除けば、床面中央付近の東寄りに集中する。中世以降に石室内で攪乱のあったことは2面の取り上げ状況図から明らかであるので、原位置を保っているとは考えがたい。しかし、刀子は下面に集中することから、ある程度攪乱の影響が及んでいない、あるいは少なかった可能性は排除できないと捉えられる。これは前稿でまとめた玉の出土状況とも整合する（青笹 2021：p48）。

資料の観察結果に先立ち、部位名称について整理する（図4）。刀子の部位は論者による定義の偏差が少ない。これは古墳時代の刀剣研究において、部位の名称統一が図られていることが影響している。刀子はその形態から刀剣のうち、特に刀の部位名称の影響を受けている（齊藤 2018）。本稿では、先学による部位名称を尊重し、「茎部」・「刃部」の名称を用いることとして、両部位の境を「関」として把握することとした<sup>(1)</sup>。このような理解に基づいて、資料の観察をおこなった。前稿の矢鏃と同様に、再現性を担保した分類を明示したうえで、型式分類を実施すべきである（青笹 2019）。しかし、下塚居古墳副葬刀子については、サンプル数が少なくヒストグラムでは有意な情報を取得できないため、型式分類をひとまず措いて資料の観察をおこなうこととし、分類・編年作業は本稿では検証しないこととした。

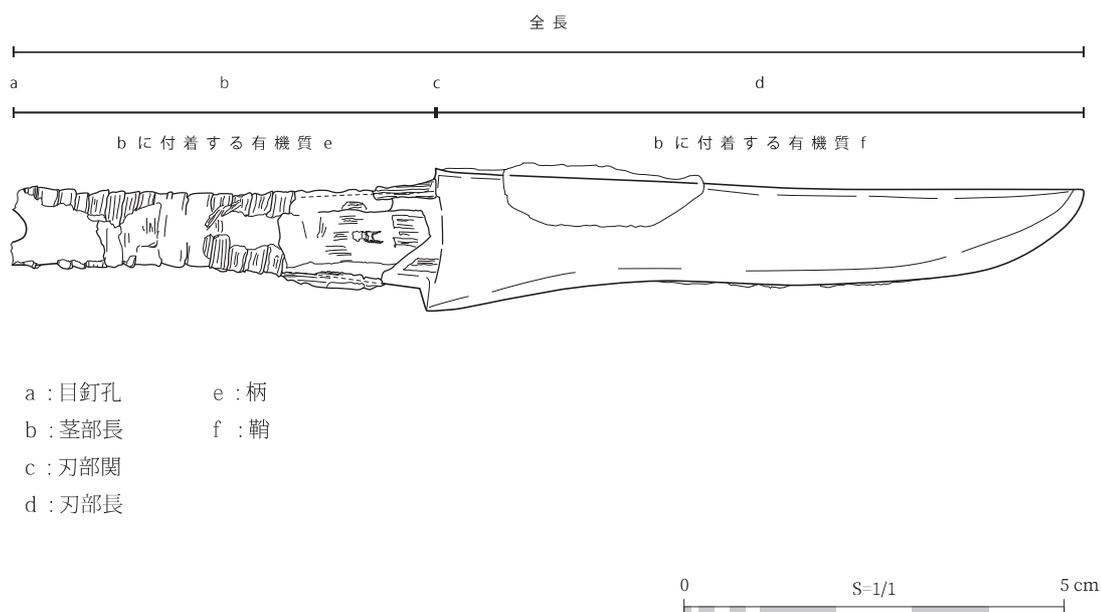


図4 刀子の部位名称図

このような理解に基づき、以下で資料の記述を進める（図5～6）。

1 刀子1 刀子本体における茎部の端部遺存状況は良好だが、刃部は欠損している。

全長120.0mm、最大幅21.5mm、最大厚4.0mmを測る。刃部現存長53.9mm、刃部最大幅19.7mm、刃部厚4.0mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の平面形態は、刃部関付近で太く、茎部の端部に向かい細くなる先細形で、茎部長55.1mm、茎部幅10.3mm、茎部厚4.0mmを測る。また、径3.6mm程度の目釘孔が空いている。

有機質は、木が茎部に遺存し、刃部には確認されなかった。このことから、木製柄の存在が想定される一方で、他の外装具については確認できなかった。有機質の遺存状況からは、柄の木質が刃部関を超えて刃部側まで及んでいることがみとれる。しかし、柄と鞘の境は確認できなかった。柄表面が遺存していないことによるものと思われるが、柄縁が関を超えた刃部側に至りなお確認できないのは不可解である。あるいは、鞘と柄が接続する箇所て柄側に段差を設ける鞘受け部であった可能性もあるが、推測の域を出ない。目釘孔と合わせると、複数部材による柄を固定した可能性が考えられる。今後の事例の蓄積を待って慎重に判断したい。

2 刀子2 刀子本体における刃部の平断面形からは、研ぎ減りした刃先とみなすこともできるが、若干の欠損があるため刃先が遺存しているとはみなしがたい。

全長170.7mm、最大幅20.2mm、最大厚3.7mmを測る。刃部残存長115.9mm、刃部最大幅20.1mm、刃部厚3.7mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の平面形態は、刃部関付近で太く柄先に向かってやや細くなるものの幅が一定となる直線形で、茎部現存長54.8mm、茎部幅11.2mm、茎部厚3.7mmを測る。

有機質は、木が茎部から刃部にかけて遺存している。しかし、その有機質の素材が不明であるため、外装具の構造は確認できなかった。有機質の遺存状況からは、取得しうる情報が少ない。厚みも薄い有機質の残滓からは、いかなる外装具の構造も復元できなかった。遺存部位からすると、柄と鞘の存在が示唆されるかもしれないが、それも表面の情報が喪失している現況では判然としない。

3 刀子3 刀子本体の茎部、刃部共に欠損しており、全形は判然としない。

全長60.2mm、最大幅21.1mm、最大厚3.9mmを測る。刃部現存長35.7mm、刃部最大幅19.9mm、刃部厚3.9mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部現存長24.4mm、茎部幅12.7mm、茎部厚3.4mmを測る。茎部の遺存する範囲から平面形態は、茎部幅が一定となる直線形を呈することが観察できるが、欠損部で幅が狭小となる可能性を完全には排除できない。

有機質は遺存しておらず、外装具の構造は確認できなかった。

4 刀子4 刀子本体は刃部のみ遺存しており、全体の形態は判然としない。

全長59.7mm、最大幅18.5mm、最大厚4.4mmを測る。刃部の断面形は三角形を呈する。

5 刀子5 刀子本体は、茎部と刃部を欠損している。

全長118.1mm、最大幅18.7mm、最大厚3.5mmを測る。刃部残存長78.5mm、刃部幅13.2mm、刃部厚3.5mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の平面形態は、関部で太く柄先に向かって細くなる先細形で、茎部現存長39.4mm、茎部幅12.7mm、茎部厚3.5mmを測る。

有機質は木が全体に遺存する。刃部関付近で明瞭な段が観察されることから、木製柄と鞘の存在が想定される。有機質の遺存状況からは、柄の構造が推定できた。柄の構造は、合わせを推定させるような側面の痕跡は確認できなかったことから、一木造と考えられる。ただ、刀子本身との装着にあたり不可欠となる目釘孔等の固定器具は見当たらなかった。単に嵌め込みによって装着していた可能性もあるが、一方で固定器具を見落としている可能性も完全には排除できない。

また、刀身に付着する有機質には、鞘表面が遺存せず、また鞘受け部や柄本体との接続部分に明瞭な段を観察することも困難であった。したがって、鞘の構造を復元するために必要な情報を十分に取得できるとは言いがたい。鞘の構造は表面の情報が喪失している現況では判然としない。今後の事例の蓄積を待つて慎重に判断したい。

6 刀子6 刀子本体は、茎部を欠損している。

全長141.1mm、最大幅19.7mm、最大厚3.6mmを測る。刃部長86.9mm、刃部幅18.8mm、刃部厚3.6mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の平面形態は、茎部幅が一定となる直線形を呈することが観察できる。茎部現存長54.9mm、茎部幅10.6mm、茎部厚3.5mmを測る。また、目釘孔と思われる弧が茎部残存部端部付近に遺存している。

有機質は木が茎部を中心に遺存する。刃部関付近で明瞭な段が観察されることから、木製柄の存在が想定される。また、刃部関よりも刀身側へ弧状に有機質が遺存する状況からは、鞘受け部の存在が想定されるが、鞘受け部であるとすれば、全周すべき有機質が部分的に張り出して遺存することを合理的に説明できる根拠を想起し得なかった。このため、刃部関付近の有機質については、柄縁の形態を反映しているものと捉えたい。また、刀身に付着する有機質はわずかであり、外装具の復元はし得なかった。

柄については、平均約3mm幅の樹皮巻を15回巻き付けていることが確認でき、現存部全てを同じ柄巻が覆っていた場合は22回程度巻き付けていたと想定される。樹皮による柄巻は柄の側面に遺存しており、柄木の構造に関する情報を取得できるような観察を果たし得なかった。

7 刀子7 刀子本体は、茎部を欠損しており、刃部先端部をわずかに欠いている。

全長102.8mm、最大幅13.5mm、最大厚2.3mmを測る。刃部残存長82.2mm、復元長84.5mm、刃部幅11.9mm、刃部厚2.3mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の遺存する範囲から平面形態は、茎部幅が一定となる直線形を呈することが観察できるが、欠損部で幅が狭小となる可能性を完全には排除できない。茎部現存長20.0mm、茎部幅9.4mm、茎部厚2.2mmを測る。

有機質は木が茎部付近を中心に遺存する。刃部関付近には段が観察されないが、少なくとも木製柄と鞘の存在が想定される。茎部、刃部に遺存する有機質からは、外装具の情報を取得出来なかった。柄も鞘も表面が遺存していないと捉えられる。

8 刀子8 刀子本体は、茎部端部の一部を欠損しているほかは完存している。

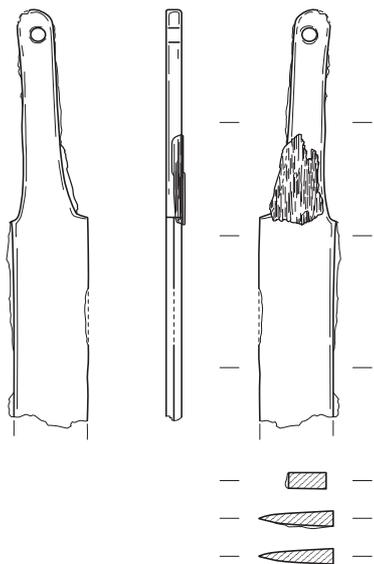
全長125.0mm、最大幅16.4mm、最大厚2.6mmを測る。刃部長72.2mm、刃部幅15.3mm、刃部厚2.6mmを測り、断面形は三角形を呈する。茎部の平面形態は、茎部幅が一定となる直線形を呈することが観察できる。茎部長52.8mm、茎部幅9.8mm、茎部厚2.2mmを測る。また、径3.6mm程度の目釘孔が空いている。

有機質は木が茎部に遺存する。表面に遺存する有機質からは、外装具の情報を取得出来なかった。柄の表面が遺存していないと捉えられる。

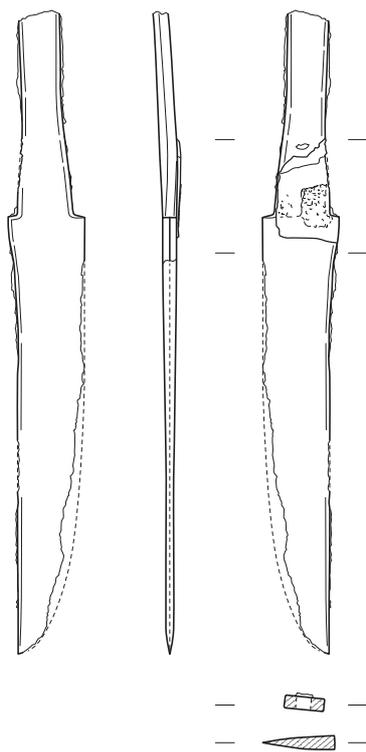
#### 4 下塚居古墳の副葬品のうち凶化未了であった資料群について

副葬刀子の検討に先立ち、他の資料の観察結果も示す。ここでは、前稿で矢鏃の資料化を果たした際、折悪く保存処理のために凶化の叶わなかった資料を提示する<sup>(2)</sup>。具体的には、鏃・弓金具・耳環である(図7)。

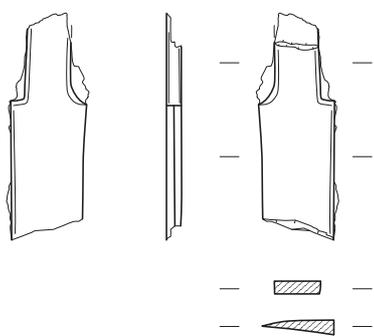
9 鏃 茎部を持たないことから、無茎式鏃と呼称される平根系の鏃である。鏃身部先端を欠損している。矢柄の一部が鏃に付着しており、矢柄先端を丸く削り出していることが看取される。矢柄の



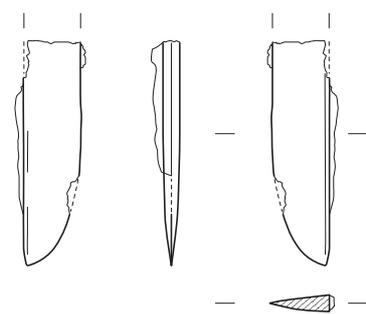
1



2



3



4

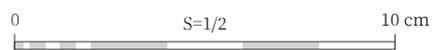
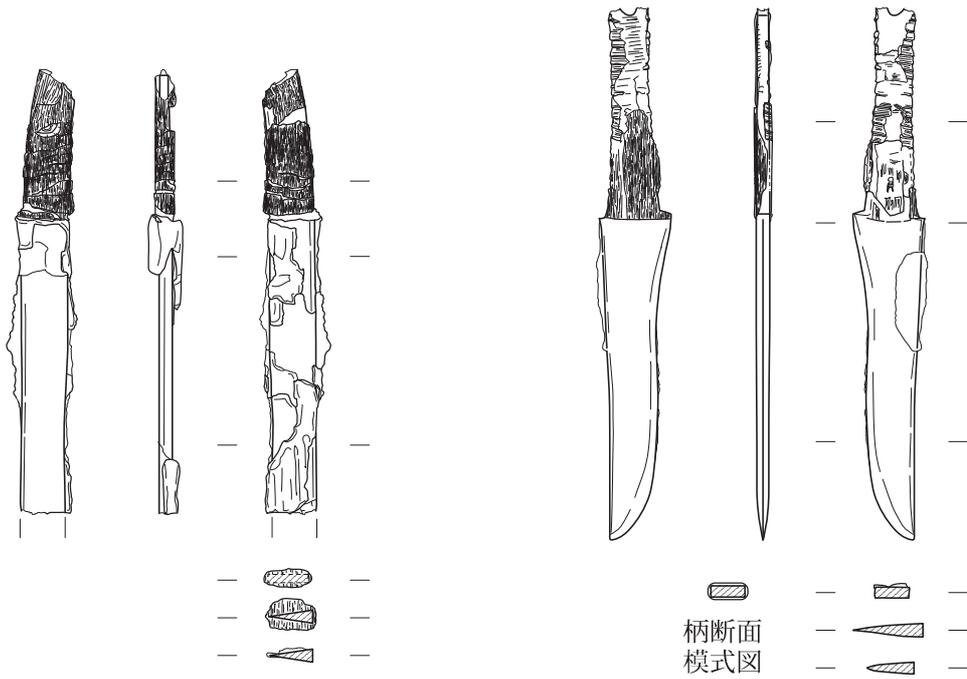
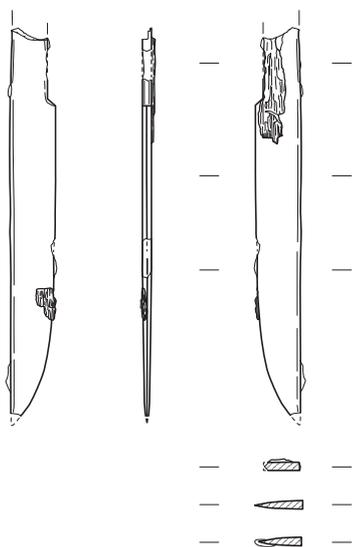


图5 下塚居古墳副葬刀子(1)

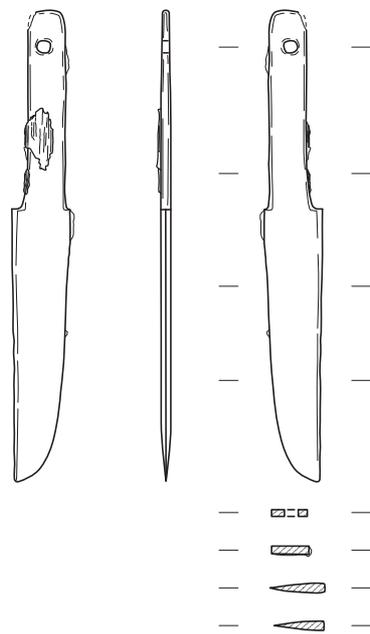


5

6



7



8

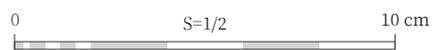


图6 下塚居古墳副葬刀子(2)

口巻は遺存していない。鏃身部内側には有機質が若干付着している。

10 弓金具 いわゆる両頭金具である。付着する有機質の材質は不明であるが、弓に由来するものと考えられる。可視部位である装飾部は楕円頭形を呈する。表面に他の金属由来の装飾は認められなかった。鉄本体の黒光りする原形であったと思われる。断面は装飾部と同様に楕円形を呈する<sup>(3)</sup>。

11 耳環1 径29.7mmを測り、断面は円形を呈する中実の耳環である。表面の質感や色調からは鉄製と推定できるが、素材の確定には至らなかった。鉄製耳環は実例が少なく、素材には、錫張あるいは銀張面鍍金が考えられる。耳環は錫、銀の無垢でない限り、表面を金で発色させることを目しているものと想定される。この理解を前提として構造を推測すれば、地金（芯材）・中間材・表面材の3層構造が考えられる。

本事例では、中実の地金のみが遺存しており、表面の観察から3層構造の残りの2層を確認することはできなかった。

12 耳環2 径30.0mmを測り、断面は円形を呈する中実の耳環である。11の耳環2と同様の構造を想定できる。本事例では、中実の地金のみが遺存しており、表面の観察から3層構造の残りの2層を確認することはできなかった。

13 不明鉄製品 耳環と同時に下塚居古墳出土品として保存処理がなされた資料である。断面が長方形を呈することから、耳環ではないことは明らかである。また、鏃や矢入れ具等の部材でもない。武器・武具・馬具で該当する器物があったとして、小片、それも付属具のみが出土する状況は小札等でもない限り、想定しがたい。ここでは判断しかねた資料ではあるが、資料の提示という点から掲載している。

## 5 埼玉県域における刀子の複数副葬について－下塚居古墳例の特質－

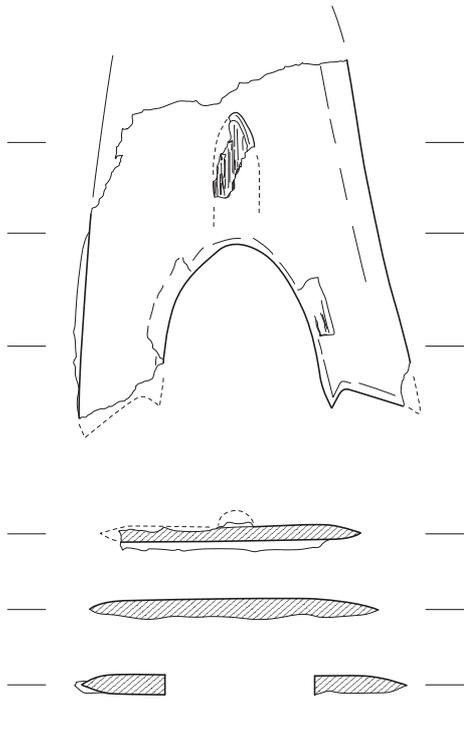
刀子は、全長・最大幅・最大厚などの計測値の偏差が大きい古墳時代副葬品の一つである。また、付着有機質から想定される鞘や柄の構造は一様ではなく、多様な外装具と本体を含めて時間・空間による偏在といった情報を抽出しがたい。

そのため、刀子は、編年・分布に基づく時空間的な位置付けが困難な器物と言える。換言すれば、モノの履歴としての「生産・流通・使用・廃棄」のサイクルのうち「廃棄」＝副葬された器物としての刀子は、副葬品のなかでは、研究素材としていわば「不向き」な資料として、等閑視されてきた器物の一つと言える。

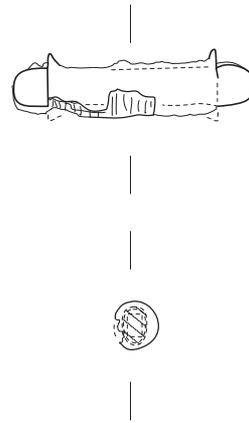
とはいえ、刀子には年代的な位置付け以外に抽出できる情報量は少なくない。例えば、研ぎ減りが想定される刃部は、実用を想起させる属性の一つである。各部位における計測値の偏差は、同時期の金属製品の部位別に見える規格性と比べると異様で、用途や使用者に応じた可能性をも惹起させる。このように刀子には、モノの履歴としての「使用」に関する情報が多く含まれる可能性があるが、実態としてその蓋然性について検証することは困難を極める。傍証として、他分野の学問領域を援用することで、その蓋然性を高める方法論もあるかもしれないが、本稿では果たせなかった。

また、副葬品全体の研究が進化したことにより、外装具から取得できる装着方法や構造の復元など、他の器物で既に確立された観察方法や視点によって得られる情報は多い。

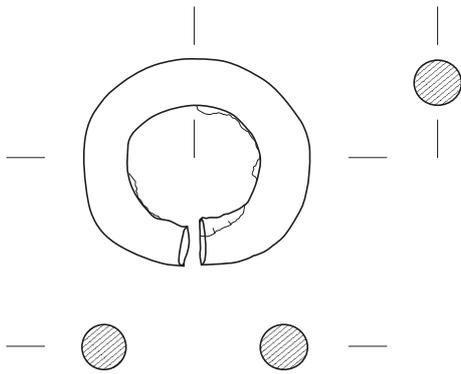
本稿では、下塚居古墳例を評価したうえで、埼玉県域における刀子の複数副葬事例を紹介する。埼玉県域における刀子を副葬する古墳は今回の集成では160基で269点を数えた。資料の遺存状況等や報告図の精度等による様々な制約が存在するため、以下の条件を設定することで、抽出の精度を確保した。



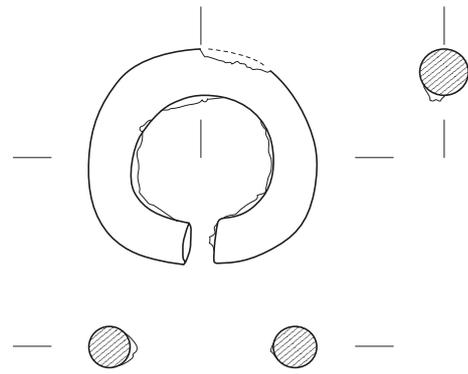
9



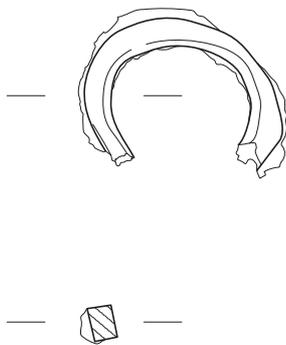
10



11



12



13

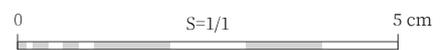


図7 下塚居古墳副葬品（その他） 鍔・弓金具・耳環

表2 下塚居古墳副葬刀子觀察表

台帳	掲載	名称	全長	最大幅	最大厚	刃部長	幅	厚	茎部長	幅	厚	目釘孔	柄	鞘	備考
43	5 図1	刀子1	120.0	21.5	4.0	53.9	19.7	4.0	55.1	10.3	4.0	3.6	○	—	
44	5 図2	刀子2	170.7	20.2	3.7	115.9	29.1	3.7	54.8	11.2	3.7	—	×	×	
45	5 図3	刀子3	60.2	21.1	3.9	35.7	19.9	3.9	24.4	12.7	3.4	—	—	—	
46	6 図4	刀子4	59.7	18.5	4.4	59.7	18.5	4.4	—	—	—	—	—	—	
47	6 図5	刀子5	118.1	18.7	3.5	78.5	13.2	3.5	39.4	12.7	3.5	—	○	○	
48	6 図6	刀子6	141.1	19.7	3.6	86.9	18.8	3.6	54.9	10.6	3.5	○	○	×	
49	6 図7	刀子7	102.8	13.5	2.3	82.2	11.9	2.3	20.0	9.4	2.2	—	×	×	
50	6 図8	刀子8	125.0	16.4	2.6	72.2	15.3	2.6	52.8	9.8	2.2	3.6	×	—	
台帳	掲載	名称	全長	最大幅	最大厚	断面	備考								
51	7 図7	耳環1	29.7	6.2	5.9	円									
52	7 図8	耳環2	30.0	6.4	6.1	円									
台帳	掲載	名称	全長	鍔長復原	鍔身部長	幅	厚	断面形態	平面形態	矢柄先端	備考				
29	7 図9	鍔	47.6	48以上	47.5	44.3	2.8	長三角形	無茎式	丸					
台帳	掲載	名称	全長	幅	厚	断面	備考								
42	7 図10	弓金具	31.7	6.7	5.8	楕円形									

- ① 刀子の最小個体数を確認できること（＝破片のみの出土事例を除外すること）
- ② 複数個体が同一の遺構、埋葬施設で出土していること
- ③ 共伴する副葬品から年代的な位置付けを明らかにできること（須恵器、矢鏃が共伴しており、かついずれかの年代的な位置付けが明確であること）

以上の3要件に合致する事例として、下塚居古墳例を除いて52基、147点を抽出した(表3)。なお、参考として、銀装ならびに鹿角装の刀子についても表3において掲載する。

表3 埼玉県域における刀子の複数副葬事例集成

No.	古墳名	墳形	規模	刀子	刀剣	鏃	武器	馬具	装身具	須恵器	備考
1	牛塚古墳	前方後円墳	47.0	銀装1・3	○	○		○	○		
2	小見真観寺古墳	前方後円墳	102.0	銀装1	○	○	○		○		有蓋脚付銅鏡1・銅鏡1
3	大日塚古墳	円墳	11.0	鹿角装2	○	○					
4	酒巻10号墳	円墳	9.0	鹿角装1		○					朱
5	舞台1号墳	円墳	11.0		7	○	○			○	
6	やねや塚古墳	円墳	18.0		6	○	○		○		
7	城戸野30号墳	円墳	18.5		5	○	○		○		
8	魂瀨7号墳	円墳	14.4		5	○			○		
9	埼玉稲荷山古墳	前方後円墳	120.0	4	○	○	○	○	○	○	画文帯神獸鏡
10	諏訪山6号墳			4		○					
11	黒田11号墳	円墳	18.0	4		○			○		
12	塚原1号墳	円墳	16.5	4		○			○		
13	柏崎5号墳	円墳	30.0	4	○	○			○		
14	柏崎6号墳	円墳	15.0	4	○	○			○		
15	帯刀2号墳	円墳	12.0	4	○	○			○		
16	野原古墳	前方後円墳	40.0	3	○	○					
17	上広瀬6号墳	円墳	18.0	3	○	○			○		
18	城戸野2号墳	円墳	10.0	3	○	○		○	○		
19	南塚原4号墳	円墳	23.0	3	○	○					
20	南塚原53号墳	円墳	18.0	3	○	○			○		
21	大御堂稲荷塚古墳	円墳	23.0	3	○	○			○		
22	台耕地稲荷塚古墳	円墳	21.0	3	○	○			○		
23	後海道4号墳	円墳	19.5	3	○	○			○		
24	鹿島1号墳	円墳	15.0	3	○	○					火打鏃状鉄製品1
25	鹿島20号墳	円墳	20.0	3	○	○					
26	ささら3号墳	円墳	16.0	2	○	○			○		
27	大御堂稲荷塚古墳	円墳	24.6	2	○	○			○		
28	諏訪山3号墳	円墳	5.2	2	○	○					
29	一本松古墳	円墳		2	○	○			○		
30	南塚原10号墳	円墳	15.0	2	○	○			○		
31	山王塚西古墳	円墳	32.0	2	○	○			○		
32	わたご塚古墳	円墳	15.0	2		○			○		
33	黒田9号墳	円墳	15.0	2	○	○			○		
34	黒田17号墳	円墳	20.7	2	○	○			○		
35	見目1号墳	円墳	19.0	2	○	○		○	○		
36	長沖3号墳	円墳	10.0	2	○	○			○	○	
37	長沖21号墳	円墳	26.0	2		○					
38	久保2号墳	円墳	23.1	2	○	○		○	○		
39	白石4号墳	円墳	16.0	2		○			○		
40	中小前田II小前田1号墳	円墳	10.0	2		○			○	○	
41	黒田1号墳	円墳	17.5	2	○			○		○	
42	城戸野15号墳	円墳	14.0	2	○	○					
43	十三塚古墳	円墳	22.0	2	○	○			○		
44	長沖9号墳		10.0	2	○	○			○		
45	冑塚古墳	円墳	37.0	2	○	○	○	○	○	○	
46	鹿島8号墳	円墳	13.0	2	○	○			○		
47	鹿島13号墳	円墳	19.0	2	○	○			○		
48	西原3号墳	円墳	11.0	2	○	○					
49	附川8号墳	円墳	13.0	2	○	○		○	○		
50	諏訪林古墳	円墳	24.5	2	○	○			○		
51	小前田1号墳	円墳	13.0	2		○			○	○	
52	鹿島11号墳	円墳	17.5	2		○			○		
53	西戸9号墳			2	○	○					
54	川角6号墳	円墳	14.5	2		○			○	○	
55	西山5号墳	前方後円墳	31.0	2	○	○			○		

下塚居古墳副葬刀子の評価 下塚居古墳では刀子が8本副葬されている。これらの資料群からは、刀子本体の形態差、外装具ともに一様ではない様子が読み取れた。すでに前項で記述してきたとおりの各資料の多様さは、刀子による年代的な位置付けが困難であることの証左ともいえる。

また、刀子が属人性の高い器物であるとの仮定にたてば、相当回の追葬を想定しなくてはならないが、他の遺物からは複数回の追葬は見出しがたい。一つの考え方としては、他の副葬品を持たず、ただ刀子のみを副葬した被葬者が次々と追葬されたような状況が想定できる。しかし、石室内の出土状況からは、この考え方を積極的に評価できる状況証拠を抽出することは困難を極める。

視点を古墳から周辺の秩父郡域における事例に目を移せば、開口している石室は多く遺存しているものの、発掘調査によって石室内の状況が明らかになった古墳がほとんど存在しないという事実が重くのしかかる（青笹 2019：p.45）。さらに周辺地域まで視点を伸ばしたとしても、刀子のみを副葬する事例は少なく、さらに刀子単体副葬という行為が重ねて行われた、刀子のみが追葬されたとみなすことのできる事例はない。つまり、刀子のみを副葬して、それが複数回にわたる追葬までなされたことを証する積極的な情報も見出しがたい。

現況においては、下塚居古墳は、県域において最多クラスの刀子保有古墳となる。追葬を積極的に評価しがたい出土状況と遺物の年代観や、県域内の他事例を渉猟しても、これは特筆できる現象として評価できるものと思われる。資料化が果たされている範囲では、下塚居古墳は、秩父郡域の中でも矢鏃と刀子を数多く副葬する古墳と言える。

埼玉県域における刀子の複数副葬 埼玉県域では刀子が複数副葬される古墳が多い一方で、装飾付刀子は少ない。わずかな銀装と鹿角装のみ確認されるに留まる。非掲載資料も含めた破片の渉猟により事例は増加するものと思われるが、本稿では果たせなかった。ここでは複数副葬の事例を紹介したい。表3の作成にあたっては、次の点がみとれた。

- ① 出土古墳の墳形、規模と刀子の副葬本数には相関がみられない。
- ② 刀剣と共伴する 경우가多く（40基、76.92%。N = 52基、以下同じ）、次いで装身具と共伴する（39基、75.00%）が武具・馬具・須恵器とはほとんど共伴しない。なお、これは方法論の誤謬も懸念されたため、複数副葬事例の抽出前まで立ち戻り検証を行ったが、共伴関係の傾向は変わらなかった。
- ③ 刀子の複数本数の中央値は2本であり、平均値でも2.76本と高くない。そのため、4本以上の複数副葬事例は刀子の副葬本数が多い事例であるとみなしうる。
- ④ 中期の事例（大日塚古墳例、埼玉稲荷山古墳例の2例）を除けば、いずれも後期・終末期古墳の横穴式石室から出土する事例である。

これらの点を総合すると、後期群集墳中の横穴式石室を埋葬施設とする円墳に、複数の刀子が、被葬者の帰属する社会構造における階層の上下に関わることなく副葬された可能性が考えられる。そして、被葬者の過半以上が刀子と共に武器（刀剣・矢鏃）、装身具を保有・廃棄（＝副葬）したことも想定できよう。また、階層によらない器物としての刀子の性格がみとることができる。

複数副葬の行為自体が一部例外を除いて後期から開始される現象からは、下塚居古墳副葬刀子は古墳時代後期以降に位置付けられる、と評価することもできるだろう。しかし、果たして集成した埼玉県域における複数副葬刀子の傾向から、本事例の年代的な位置付けをなしえるのか。という点には方法論上の疑問を拭い去ることはできない。ひとまず、現状では、集成を援用する範囲において、下塚居古墳例を古墳時代後期以降と措定するに留め、今後の検討の課題としたい。

## 6 まとめ

下塚居古墳副葬刀子は、形態差が大きく、刀子の年代的な位置付けが不安定である以上、明確な時期については判断を慎重にするべきである。本稿では便宜的に援用した範囲で、古墳時代後期以降と指定したが、方法論に課題がある以上、今後の検証によって更新されることが期待される。

本稿において刀子の年代的な位置付けを探るために便宜的に設定した条件は、いずれも刀子単独の年代的な位置付けを図る編年作業に必要な要件ではない。これらの条件は、同一古墳における刀子の同時性または前後関係と、共伴遺物による年代的な位置付けの援用を図るために便宜的に設定したに過ぎないことは注意が必要である。遺物の年代的な位置付けを議論する上では、その遺物本体による編年作業が不可欠であることは言を俟たない。しかし、本稿では基礎的情報の提示を目的としており、その年代的な位置付けを探るために新たな編年を組むことを目的としていない。本来は、刀子の年代的な位置付けは、悉皆的な集成と緻密な観察に基づく精緻な図を踏まえた、再現可能なデータによる分類作業に基づく膨大な作業量を経て構築される編年に依ってなされるべきである。本稿では目的が異なるために果たされなかったが、今後の研究の進展によって地道な作業の蓄積によってのみ編まれるであろう編年が構築されることを期待したい。

## おわりに

下塚居古墳は墳丘規模が約 14m 以上の円墳で、埋葬施設に無袖羽子板形横穴式石室を採用している古墳である。石室内からは原位置を保っていないが、副葬品が出土している。このうち刀子は、研ぎ減りなど、モノの「使用」に関わる可能性のある情報が取得できた一方で、平面形態に偏差があるため、年代的な位置付けを果たし得なかった。今後慎重な検討を踏まえて改めて判断したい。ただし、状況からは、これまでに位置付けてきた石室（TK43 型式期以降）、矢鏃（TK209 型式期）、玉（古墳時代後期前半から中葉以降）に比べて特に大きく逸脱した位置付けは想定しがたい。また、追葬の有無を検証するにあたって、刀子に年代幅があるのか、あったとしてどの程度の幅があるのかは究明すべき課題である。ただ、石室内の出土状況からすると、追葬の有無の峻別は困難であり、最終的な副葬品の年代的な位置付けには逡巡する不確定要素がまだ残されている。

本稿では、刀子の基礎的な情報を提示するにとどめ、副葬品総体についての位置付けは稿を改めて検討したい<sup>(4)</sup>。

執筆にあたって、資料調査等で下記の個人・機関にお世話になった。末筆ながら感謝申し上げたい。また、本稿をなすのは、昨年度中の予定で調整をしていたにも関わらず、筆者の力量不足で一年遅れたものである。小鹿野町教育委員会の肥沼氏には多大なるご迷惑をお掛けしたにも関わらず、ご理解いただき、今回の掲載に至ったものである。改めて記して感謝申し上げる。

（敬称略）

小鹿野町教育委員会・本庄市教育委員会

太田博之・大谷 徹・肥沼隆弘・齊藤大輔・鈴木嵩司・関 義則・田中広明・橋本達也・平井洸史・平林大樹・山本正実

## 註

(1) 本稿では「<sup>まち</sup>関」を刃部関として位置付けている。筆者は、これを鏃における「頸部関」・「茎部関」の名称と同根の問題として捉えている。筆者は、鏃の部位名称においては田中新史の見解を支持し（田中 1988）、可視となる頸部の従属的な属性として関を「頸部関」としてこれまで取り扱っている（青笹 2019：p.47）。同様の論理で完成形の刀子を想定した場合に、関を呑み込む特殊な形態を除き、可視となる刃部側と関は不可分な関係にあるので、「刃部関」として理解して取り扱っている。異論もあろうかと思うが、筆者は、上述の考え方に則り、関を「茎部関」とする積極的な理由を見出しがたいと考えている。

(2) 2018年の調査時点ではすでに実見が叶わず、保存処理に出されていた資料群である。今回の図化により、図化対象としている資料は全て資料化が完了した。今後は当古墳の位置付けを考究するとともに、資料化を果たしたのちの見聞や検討を踏まえて、総括的な整理を要するものと理解している。また、石室上面において中世以降の攪乱がみられる事実も重要で、本稿で資料化を果たした刀子が古墳時代に帰属しない可能性は、完全には排除できなかった。目釘孔を有する刀子などは、筆者はこれまでほとんど認識してこなかった事例である。今後の事例の蓄積を踏まえて批判的に継承いただきたい。

(3) 旧稿において、弓金具の断面形を長方形として想定している（青笹 2019：p.54）。有機質に覆われていたことや、構造への無理解から、当初は想定の根拠となる箇所を直線で結線したことによるものである。その後、弓金具の観察を通じて、金具の断面形が方形となる事例が少ないことを把握するに至り、認識を改めた。現在では既往の資料も含めて、全て断面は楕円形であると認識しており、旧稿での誤認をここに修正するものである。今後の総括的な整理を通じて認識の更新を踏まえて、資料化が果たされるよう努めたい。

(4) 秩父郡域における古墳時代副葬品の研究状況は旧稿にて整理している（青笹 2019：pp.43 - 46）。旧稿を記した時点では明記しえなかったが、今後の資料化が必要な資料としては、秩父市大宮金室から出土したと伝わる資料群が挙げられる。東京国立博物館に所蔵される当該資料群は、数量も多いことから、資料化が容易ではなく、資料の存在自体は認知されているが、現在に至るまで埼玉県域の副葬品研究の俎上に上げることができずにいた。秩父郡域における数少ない副葬品であるため、今後の課題としてあげておきたい。すなわち、筆者は、秩父市大宮金室出土古墳時代副葬品の資料化と年代的な位置付けが、秩父郡域における古墳時代研究において重要な課題の一つとして捉えている。また、下塚居古墳例の位置付けを考究したうえで、金室例と同様に資料化が果たされていない地域における遺物群の基礎的な情報提示に向けて、今後も継続した取り組みが必要と考えている。

## 図表出典

図 1～3 青笹 2021 で作成した地図を再調整した。

図 4～7 筆者実測。

表 1～4 筆者作成。

## 引用文献

青笹基史 2019 「秩父郡小鹿野町下塚居古墳副葬矢鏃の検討」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 12 号

埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.43 - 62

青笹基史 2020 「秩父郡小鹿野町下塚居古墳遺構の検討」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 13 号

埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.77 - 95

青笹基史 2021 「秩父郡小鹿野町下塚居古墳副葬玉の検討」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第 14 号

埼玉県立史跡の博物館 行田 pp.43 - 56

齊藤大輔 2018 「古墳時代武器研究史のなかの刀剣研究」『古代武器研究』Vol.14 古代武器研究会 山口 pp.77 - 102

田中新史 1988 「古墳出土の胡録・靱金具」『井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録』言叢社 東京 pp.164 - 214

※紙幅の都合もあり報告書は割愛した。